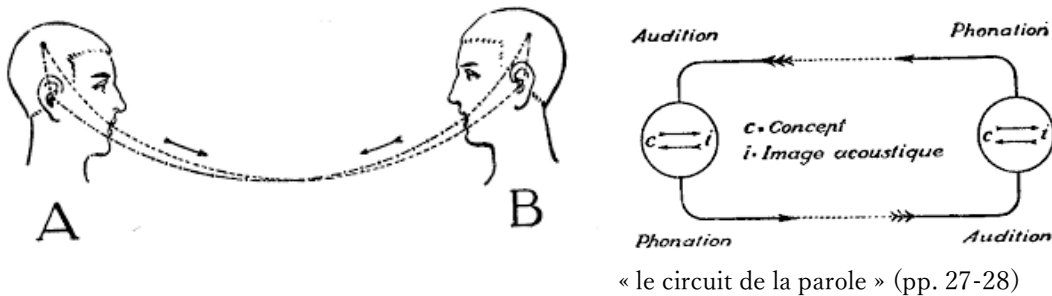


「わたし」の多層化と人称転換 - 自伝・移住談・自由間接話法 -

阿部宏・石田雄樹・矢野禎子・牧彩花

19世紀ヨーロッパの言語研究では、言葉をにやう主体への関心が薄かった。これに対し、言語の共時態やそれが依拠する基盤としての「発話主体 (le sujet parlant)」の概念を明示的に導入したのはソシュール (1857-1913) であろう。例えば、『一般言語学講義』(Le Cours de linguistique générale, Payot, 1916) の以下の図がよく知られている。



ソシュールによって始めて、言葉は心の問題として位置づけられることになった。ところで、これによれば発話主体たる A が思考を音に変換して発声する。聴取主体たる B はそれを聞き取り、音を思考に復元して理解する。A と B が相互に役割を交代して同様の過程を繰り返すのが、会話である。また、書き言葉にあっては、書き手たる A は思考を文字に変換して提示する。読者たる B はそれを読み、文字を思考に復元して理解する。いずれにせよ、発話行為はソシュールによってそのように図式化された。

しかしこうした「言葉のやりとり」観においては、発話主体の主体としての唯一性や思考の首尾一貫性が暗に前提とされてしまっている。他方、発話主体の均質性に疑義を呈するような事例は日常生活にも、文章語中にも満ちあふれているのではなからうか。

本シンポジウムは、会話データや小説などの文章語を素材に、「わたし」たる発話主体の様々なありかたについて、主体の多層化という観点から多角的な考察を試みるものである。

阿部はフランス語の自由間接話法等について、日本語の自由話法とも関連づけて考察し、作中世界に潜む匿名の発話主体という仮説を提示したい。

石田は、自伝文学を主な分析対象とし、「わたし」という一人称の語りに潜む多層性とその文学的効果について考察する。

矢野は、自身の移住経験をフランス語で語る日本人の「わたし」の複数性と、彼らが他者を前に自己を語る際に現れる第三の主体の存在について考察する。

牧は、二人称・三人称に «je» が転換される事例をもとに、フランス語における「人称の転換」とそれに伴う発話者の情意の表明について考察する。